

DBJ Research Center on Global Warming
Discussion Paper Series No.33 (11/2006)

大切なものをまもる
－社会的共通資本の原点－

宇沢 弘文

本論は、執筆者個人の暫定的な研究（内容、意見については執筆者個人に属するもの）であって、関心ある研究者との議論等のために作成されたものである。

大切なものをまもる — 社会的共通資本の原点

明治以来の近代化の過程は、さまざまな社会的共通資本を現実の制度として担ってきたコモンズ (commons) の制度の崩壊をもたらした。その代表的なケースが小繋事件である。この小繋事件について書かれた古典的な名著が戒能通孝著『小繋事件—三代にわたる入会権紛争—』(岩波新書, 1964 年) である。この書物のあとがきに戒能先生が残された印象的な言葉がある。

「失うべきでないものを失わないこと、そこに人間性の出発点がある。」

この戒能先生の言葉もまた、ジョン・ラスキンの有名な言葉 "There is no wealth, but life." と相通ずるものがある。

今から 50 年前、私は数学から経済学に移った。その直接的なきっかけは、河上肇の『貧乏物語』を読んで、大きな感動を覚えたからであった。とくに、序文で、河上肇がジョン・ラスキンのこの言葉を引いて、経済学の本質を説いたが、その言葉は、当時の私の心情にぴったり適合した。それはまた、私が長年、追い求めてきた社会的共通資本の考え方を象徴的に表わす言葉でもある。

上の戒能先生の言葉はまた、福井俊彦日銀総裁が 2005 年 7 月 9 日「経済教育サミット」の基調講演の中で述べた、次の発言と鮮明な対照をなす。この破廉恥極まりない発言は小中学校の子どもたちに株式などを運用していかに儲けるかを教えようという小泉・竹中の「教育改革」の基調講演の中でなされた。内橋克人さんのいう「悪夢のサイクル」はいま日本でもっとも深刻なかたちで進行しつつある。

「自分の持っている大切なものを手放してお金に代えても、そのお金は価値をきちんと保全し、次に必要なものを手に入れることができる。」

「大切なもの」は普通、お金に代えられない、あるいは代えてはいけないものである。人生の最大の悲劇は、「大切なもの」を国家権力に奪い取られたり、追いつめられてお金に代えなければならなくなったときである。

山本敏晴さんがつくられた『あなたのたいせつなものはなんですか?—カンボジアより』(小学館, 2006 年) という興味深い絵本がある、カンボジアの子どもたちに「あなたの大切なものは何ですか」という質問を出して、それを絵に描いてもらって、子どもたちの文章を付けて、絵本にしたものである。9 才から 14 才までの 20 人ほどの子どもたちの答えは感動的ですからある。「家族」、「わたしの家」、「牛」、「わ

たしの国」,「ほとけさま」,「戦争を無くすこと」,「地雷を無くすこと」,「お花」,「学校」,「牛車」,「道」,「森を守ること」,「魚」,「トリ」,「女神」,「ヘビ」,「ブタ」など.中には,「わたしは「人身売買と売春」がきらいです。」という悲しい言葉もある.

社会的共通資本 (Social Common Capital) の考え方を一言でいうならば,「大切なものをまもる」 Preserve Things as Dear as Life Itself である.そして,このことが,現実に可能となるような制度的,社会的,文化的諸条件を明らかにしようとするものである.

水俣と社会的共通資本

私が初めて水俣の地を訪れたのは,十数年ぶりに日本に帰ってきて間もないときだった.熊本大学の若い医学者原田正純さんに連れられて,胎児性水俣病の患者さんに接し,その母親の悲しみをみたときの衝撃は大きかった.それまでの経済学の考え方を根本からくつがえし,人生観まで決定的に変えたといってい過ぎではない.

水俣湾はかつて,魚が湧き出すといわれたほど,すぐれた漁場だった.また水俣は風光明媚な自然に包まれて,訪れる人々の心をなぐさめる景勝の地でもあった.このすばらしい自然のなかで,人々は漁業という生業に従事し,経済的に大へんゆたかな,そして人間的にも,文化的にもすぐれた,平和な生活を営んでいた.ところが,チッソの営業行為によって,この美しい水俣湾は完全に破壊され,わかっているだけでも一万人を超える人々が水俣病に苦しみ,水俣湾では漁業という生業をつづけることができなくなってしまったのである.

チッソは長い間,営業の自由の名のもとに,水俣湾を自由に汚染し,徹底的に破壊するという犯罪行為をおこなってきた.しかし,水俣湾という自然は決して自由財あるいは公共財ではない.水俣湾は,有史以来,地元の人々にとって,共通の財産として,大事に取り扱われ,海を汚すことはきびしく禁止されていた.水俣湾の魚を取って,生計を立てる人々は,水俣湾の海を神聖なものとして,尊崇してきた.その,大切な人々の共通財産である水俣湾を,チッソは勝手に使って,徹底的に汚染し,破壊しつくしてしまった.そして,数多くの人々が脳神経中枢を冒され,言語に絶する苦しみを味わいつづけてきた.

「水俣病患者を見ると,これが犯罪でないのならば,ほかに犯罪がありうるものかという感想をなんびとでも抱くであろう.」

これは,惜しまれながら若くして世を去った刑法学者の藤木英雄教授が,その名

著『公害犯罪』（東大出版会，1975年）のなかに残された言葉である。じつは、藤木君は旧制一高，最後の生徒の一人で，その頃から親しくしていた。水俣に行くときも，藤木君が一緒のことが多かった。東大法学部の教授で，刑法学を専門としていた藤木君の言葉は重い。

水俣病を始めとして，全国の公害問題にかかわることによって，私は，それまで専門としていた近代経済学の理論的枠組みの理論的矛盾，倫理的欠陥を強く感ずるようになった。そして，水俣病を始めとする数多くの公害問題の原因を解明し，その人間的被害の実態を分析し，その根元的解決の途を探ることができるような理論的枠組みとして，社会的共通資本の考え方に到達した。

社会的共通資本は，一つの国ないし特定の地域が，ゆたかな経済生活を営み，すぐれた文化を展開し，人間的に魅力ある社会を持続的，安定的に維持することを可能にするような自然的，社会的装置である。社会的共通資本の管理，運営は，決して市場的基準，あるいは官僚的基準のよって決められるべきものではなく，あくまでも，一人一人の市民の人的尊厳を守り，魂の自立を保ち，市民的自由が最大限に確保できるような社会を形成するという視点にたっておこなわれる。公害問題は，産業的あるいは都市的活動によって，自然環境が汚染，破壊され，その機能が阻害され，直接，間接に人間に対して被害を与える。したがって，公害を防ぐためには，産業的あるいは都市的活動に対して，きびしい規制をもうけて，自然環境という社会的共通資本を傷つけることがないようにすることが要請される。そして，ひとたび公害問題が発生したときには，自然環境を汚染，あるいは破壊した企業の責任をきびしく追求するとともに，社会的観点にたって，公害被害者の本源的救済をおこなわなければならない。

Art is long, Life is short.

社会的共通資本としての医療の考え方を象徴するのが，ヒポクラテスの有名な言葉 *Art is long, Life is short.* である。この言葉は，私が学生だった頃は，「人生は短く，芸術は長し」と訳されていたが，*Art* が医術を意味することを知ったのは，ずっと後になってからである。

「人間の生命は短い。しかし，その短い生命を救おうとする医術は永遠の生命をもって，過去から現在，そして未来につづく。」

医術が永遠の生命をもちうるのは，一人一人の医師がヒポクラテスの誓いに忠実に，医師として，また人間としての生きざまを全うし，医術を次の世代に伝える営

為に全力を尽くしているからである。

このことは、社会的共通資本のすべての分野についていえるのではないだろうか。たとえば、「社会的共通資本としての数学」を考えるとときにも同じようなことがいえる。ピタゴラスは狂信的な集団に追われて殺されてしまうが、ピタゴラスの定理は永遠の生命をもって現在に受けつがれている。「社会的共通資本としての数学」というとき、何故数学が永遠の生命をもって、過去から現在、そして未来につながっているのか、その制度的、社会的、そして文化的諸条件を明らかにしようとするものである。

自然環境とは

経済学では、自然環境は資本とみなさないのが一般的である。したがって、自然環境を社会的共通資本の構成要素と考えることに対して、多くの経済学者はつよい違和感をもつのではないだろうか。そこで、自然環境とは何かについて、改めて考察することにしたい。

自然環境は具体的には、森林、草原、河川、湖沼、海岸、海洋、沿岸湿地帯、地下水、土壌、さらには大気などを指す。また、そこに生存するさまざまな動・植物、微生物、さらには土壌、鉱物などもすべて自然環境の一部である。

自然環境というとき、これらの構成要素が相互に密接に関連した、一つの全体としてとらえる。たとえば、一つの森林をとったとき、たんに森林を構成する樹木だけでなく、伏流水として流れる水、土壌、そこに生存する動・植物、微生物などを統合して、一つの総体としての森林を自然環境、あるいはたんに環境という概念としてとらえているわけである。

自然環境について、もっとも特徴的な性質は、その再生産のプロセスが、生物学的ないしはエコロジカルな要因によって規定されていることである。一つの森林を自然資本としてとらえて、たとえば、樹木の総重量によってそのストックをはかることにしよう。森林のストックは時間的経過にともなってどのように変化するであろうか。森林を構成する個々の樹木がどのようなペースで成長し、あるいは枯れてゆくかによってはかれる。それは、個々の樹木の種類、年齢に依存するとともに、森林のなかに存在する水の流れ、土壌の性質、さまざまな動植物、微生物の活動によっても影響される。

同じような現象は、他の自然環境についてもみられる。よく引用されるのは漁場である。ある一つの、明確に境界を付けられた漁場における魚の再生産のプロセス

は、魚の餌となるプランクトン、小魚などがどれだけ存在するかに依存するだけでなく、水温、河川や海水の流れ、沿岸のエコロジカルな諸条件、場合によっては上流の森林の状態によっても左右される。

このようにして、自然資本のストックの時間的経過にともなう変化は、生物学的、エコロジカル、気象的な諸条件によって影響され、きわめて複雑な様相を呈する。

自然環境を自然資本としてとらえるとき、規模の経済あるいは外部（不）経済の概念もまた、経済理論における伝統的な概念とは本質的に異なる。

規模の経済について考察するために、森林を例にとってみよう。森林のストックをかりに、その面積ではかるとして、森林の面積が二倍になったときに、さまざまな経済活動の過程における森林の果たす役割は何倍になるであろうか。たとえば、森林という自然資本から、木材という産出物が生産されるとしよう。まったく同じ面積をもつ同じ樹相をもった二つの森林を一緒にしたとする。年々生産される木材の量は二倍になるであろうか。ここでも、工場生産を中心とする経済理論の常識をそのまま適応することはできない。しかし、森林を自然資本としてとらえたとき、この点にかんする分析は、統計的にも、実証的にも十分に満足できるようなかたちではなされていない。

一般に、自然環境を自然資本としてとらえたとき、ある水準までは外部経済が働くことは否定できない。そして、その水準を超えたときは、外部不経済の現象がみられると考えてよいであろう。また、環境の果たす経済的役割を考察するとき、自然環境を構成するさまざまな要素の間に存在する、錯綜した相互関係を無視することはできない。森林の経済的機能を考えるとき、水の流れ、さまざまな樹木の間相互関係、土壌の性質、森林に生存するさまざまな生物、微生物の間には複雑な関係が存在し、森林の果たす経済的機能に対して大きな影響を与える。そこには、工場生産のプロセスにみられるような決定論的、機械論的な関係を想定することはできない。とくに、気象条件の及ぼす影響を考慮に入れるとき、自然環境の果たす経済的役割は本質的に統計的、確率論的な意味をもつことを指摘しておきたい。

自然環境と人間活動

自然環境を経済学的に考察しようとするときに、まず留意しなければならないのは、自然環境に対して、人間が歴史的にどのようなかたちで関わりをもってきたかについてである。この問題は、広く、文化をどのようにとらえるかに関わるものであつ

て、狭義の意味における経済学の枠組みのなかに埋没されてしまってはならない。「文化」というとき、伝統的社会における文化の意味と近代的社会において用いられる意味との間に本質的な差違が存在することをまず明確にしておきたい。

この問題について重要な視点を与えたのが、アン・ハイデンライヒとデヴィッド・ホールマン(An Heidenreich and David Hallman)の論文 "From Sacred Being to Market Commodity: The Selling of the Commons?" 「売りに出されたコモンズ—聖なる存在から市場的財へ—」である。

ハイデンライヒ=ホールマンは、文化について、二つの異なった考え方が存在することを指摘する。伝統的社会では、「文化」はつぎのような意味をもつ。「社会的に伝えられる行動様式、技術、信念、制度、さらに一つの社会ないしはコミュニティを特徴づけるような人間の働きと思想によって生み出されたものをすべて含めて、一つの総体としてとらえたもの」を意味する。他方、近代社会においては、「文化」は「知的ならびに芸術的な活動」に限定して考えるのが一般的である。

マサイ族の若者が「文化」というときには、同年代の若者たちのことを想起し、伝統的な制度のもとで、社会がどのように組織され、自然資源がどのように利用されているかに思いをいたす。しかし、北ヨーロッパの人々が「文化」というときには必ず、芸術、文学、音楽、劇場を意味している。

環境の問題を考えると、宗教が中心的な役割を果たす。宗教は、自然を創り出し、自然を支配する超人間的な力の存在を信じ、聖なるものをうやまうことだからである。

自然と人間との間の相関関係が具体的なかたちで表現されるのは、自然資源の利用という面においてである。伝統的社会では、人やものの移動がきわめて限定されているため、生活を営む場所で利用可能な自然資源に頼らざるをえない。したがって、これらの自然資源の涸渇はただちに、伝統的社会の存続自体を危うくする危険を内在している。伝統的社会の文化は、地域の自然環境のエコロジカルな諸条件にかんして、くわしく深い知識をもち、エコ・システムが持続的に維持できるように、その自然資源の利用にかんする社会的規範をつくり出してきた。

自然資源の利用にかんして、長い、歴史的な経験を通じて知識が形成され、世代からつぎの世代に継承されていった。自然環境にかんする知識と、その世代間を通ずる伝達によって、文化が形成されると同時に、文化によって新しい知識が創造されてゆく。何世代も通じて知識が伝達されてゆくプロセスによって社会的制度がつくり出される。そして、日常的ないし慣行的な生き方が社会的制度として確立し、一つの文化を形成することになる。

自然と人間との間の相関関係がどのような形で制度かされるかによって、人間と人間との間の社会的関係もまた規定されることになる。どのような自然資源を、どのようなルールにしたがって利用すべきかが文化の中止的な要素となる。したがって、年長者の教示ないしは指示に重点が置かれ、自然資源の利用は、社会のすべての構成員に対して公正に、また利用可能となるような配慮が、どの伝統的社会についても充分払われている。

伝統的社会では、自然環境にかんする知識は、スピリチュアリティとの関連において形成されている。たとえば、シャーマニズムは、三千万人を超えるアメリカ・インディアンが信じていた宗教であったが、それは自然資源を管理し、規制するためのメカニズムであって、その持続的利用を実現するための文化的伝統であった。

伝統的社会では、自然資源を持続的なかたちで利用するのは、また将来の世代だけでなく、他の伝統的社会を考慮に入れて、自然資源の保全をはかってきた。

人間の移動が自由になるとともに、文化、宗教、環境の乖離は拡大化されていった。とくにヨーロッパ諸国によって、アフリカが植民地化されるプロセスを通じて、資源の搾取がより広範な地域でおこなわれるようになり、伝統的社会のもつ、それぞれの限定された地域に特定化された知識は無視され、否定されていった。アフリカ以外の大陸でも事情は同じであった。伝統的な自然環境と密接な関わりをもつ知識は経済発展の名のもとに否定され、抑圧されていった。

ハイデンライヒ=ホールマン論文で、近代キリスト教の教義が、自然の神聖を汚し、伝統的社会における自然と人間との乖離をますます大きなものにしていった経緯がくわしく論ぜられていることは興味深い。キリスト教の教義が、自然に対する人間の優位にかんする論理的根拠を提供し、人間の意志による自然環境の破壊、搾取に対してサンクションを与えた。と同時に、自然の摂理を研究して巧みに利用するための科学の発展もまた、キリスト教の教義によって容認され、推進されていった。

ルネッサンスは人間の復興であったが、それは自然の凋落を意味していた。近代思想の発展はさらに、人間の優位を確立し自然の従属性に拍車をかける。フランシス・ベーコンにとっては、すべての創造物は人間との関係においてのみ意味をもち、自然は天からの賜物であって、物理学と化学を中心とした科学の発展を通じて、そのゆたかな収穫を搾取されるものにすぎない。ルネ・デカルトはさらに極端なかたちで論議を進めていった。デカルトの機械論的、決定論的世界観にもとづけば、自然は、数学的な法則にしたがって機械的に動く存在であり、自らの意志をもたず、受動的な存在にすぎない。自然の価値は、人間にどれだけの効用をもたらすかによ

ってはじめてはかることができるとされていた。自然を抑圧し、搾取することに対してなんら制約条件はもうけられるべきではない。

環境問題に関する二つの国際会議

環境と経済の関係について、この 30 年ほどの間に本質的な変化が起こりつつあることを指摘する必要がある。この変化は、国連の主催のもとに開かれた環境問題にかんする二つの国際会議のテーマに象徴的に現われている。1972 年、ストックホルムで開かれた第一回の環境会議と 1992 年、リオ・デ・ジャネイロでの第三回の環境会議である。

1960 年代を通じて顕著にみられるようになった自然破壊とそれによって引き起こされた公害問題は、歯止めのないかたちで進行していった工業化と都市化の必然的な帰結ともいえる性格をもっていた。当時、スウェーデンでは、一万を越える湖沼の大半が死んでしまったといわれていた。水質の悪化によって、魚やその他の生物が住むことができなくなり、周辺の森林でも多くの樹木が枯れはじめた。その直接的な原因は酸性雨によるものであった。それは大部分、イギリスや、東ドイツ、ポーランドなどの東欧の社会主義の国々における工業活動によって惹き起こされることが綿密な調査によって明らかにされていった。1972 年、ストックホルムで開かれた第一回の国連環境会議は、公害問題の国際性に注目したスウェーデン政府の提案にもとづいて開催されたのである。

ストックホルム環境会議の主題は公害問題であった。それは、日本における水俣病問題や四日市大気汚染公害に象徴されるように、産業活動の結果、自然環境のなかに排出される化学物質によって惹き起こされたものがある。これらの産業廃棄物は、二酸化窒素、硫黄酸化物、有機水銀など、それ自体いずれも有害、有毒な物質であって、直接人々の健康を侵し、生物に被害を与える。

1960 年代から 70 年代にかけて世界的な拡がりをもった公害問題は、それによってもたらされる人間的犠牲の深刻さ、環境破壊の大きさの点から、これまでの人類の歴史において、平和時にはまったく経験しなかった規模をもつものであった。

ストックホルム会議に象徴される公害問題に対する社会的関心は、産業活動のあり方に対して大きな反省を迫り、公害規制のためにさまざまな政策が実行され、数多くの制度的対応がとられることになった。その後、30 年ほどの期間に、産業活動にとまなう公害に対して、かなりの効果的な規制がとられ、少なくとも資本主義の多くの国々については、工業化、都市化にとまなう公害問題は基本的に解決の方向

に進みつつあるとあってよい。しかし、水俣病問題の例が示すように、1960年代の公害によって惹き起こされた深刻な被害に対する本質的な救済はまだとられていない。また、発展途上諸国の多くについて、公害問題はいぜんとして未解決であるだけでなく、なかにはいっそう拡大化し、深刻化しつつある国も少なくないことを指摘しておかなければならない。

1992年のリオ環境会議の主題は、地球規模における環境の汚染、破壊についてであった。地球温暖化、生物種の多様性の喪失、海洋の汚染、砂漠化などの問題である。なかでも、深刻なのは、地球温暖化の問題である。地球温暖化は、主として、化学燃料の燃焼によって排出される二酸化炭素が大気中に蓄積され、いわゆる温暖化効果が働き、地表大気平均気温の上昇を惹き起こすことによって、地球規模における気象条件の急激な変化をもたらすことに関わる諸問題を指す。温室効果は、二酸化炭素の他に、メタン、亜酸化硫酸、フロンガスなどのいわゆる温室効果ガスによっても惹き起こされる。これらいずれも大気中にごく微量しか含まれていないが、地表大気平均気温の上昇に対してつよい効果をもつ。

二酸化炭素をはじめとして温暖化効果ガスの大部分は化学物質としては無害であり、直接人体に影響を与えたり、動・植物に危害を与えるものではない。しかし、地球規模における蓄積が進むとき、地表大気平均気温の急激な上昇という温暖化現象を惹き起こす。

森林の伐採もまた、地球温暖化を促進する。とくに熱帯雨林の急激な消滅は、植物の光合成作用による大気中の二酸化炭素の吸収効果の減少をもたらす。熱帯雨林の消滅はまた、生物種の多様性の喪失に対して決定的な影響を及ぼす。地球上には、1000万種に上る生物種が存在すると推定されているが、そのうち30%以上が熱帯雨林のなかにあるといわれている。しかも、その大部分はまだ同定されておらず、もし現在の時点で消滅してしまうと、永久に回復不可能となってしまう。

熱帯雨林とその周辺に存在する多様な生物種が、人類の歴史において果たしてきた役割は大きいものがある。また、将来にわたって重要な意味をもちつづけることは確実とあっていいと思う。米、小麦をはじめとして、農作物の大部分は、その原種が、森林、草原から求められたものである。農作物のなかで、害虫病によって全滅してしまったものが数多く存在しますが、その多くは、森林のなかから、新しい生産種を見いだすことによって代替されてきた。また、現在用いられている医療品の50%近くが、熱帯雨林ないしはその土壤に生存する微生物、生物を原材料としてつくり出されたものであるといわれている。

地球環境問題の倫理的視点

二十一世紀に入って、地球温暖化、生物種の多様性の喪失などの地球環境に関わる問題が、おそらく人類がこれまで直面したもっとも深刻な課題として、まさにダモクレスの剣のように私たちの頭上に迫っている。このとき、アマゾンの熱帯雨林に住む人々の清々しい生き方が、私たちにとって暗夜の星のような輝きをもっている。それは、ソースティン・ヴェブレンの思想をそのまま、具現化したものであるといえてよい。

産業革命を契機として展開された近代的科学を基礎とする技術に対する盲目的な信頼感と、新古典派経済学にもとづく社会的、経済的条件を是とする非人間的生き方が支配している。この倫理的偏向を身にしみて感じさせられるエピソードを知る機会をもつことができた。ブラジルのすぐれた研究者ユージニオ・ダ・コスタ・エ・シルヴァ(Eugenio da Costa e Silva) の論文『生物種の多様性と知的所有権』"Biodiversity-Related Aspects of Intellectual Property Rights" を通じてである。

アメリカの製薬会社が開発する新薬の約75%は、つぎのような形で作り出されているといわれている。アメリカの製薬会社は数多くの専門家をアマゾンの熱帯雨林に居住する少数民族の部落に送って、その長老あるいはメディシンマンを訪ね、伝承的に受けつがれてきた医療の技術を聞く。それは、アマゾンの熱帯雨林のなかに生息する動植物、微生物や、土壌、鉱物などについて、どのような症候、どのような疾病、傷害の治療にどのように使ったらよいかについてである。長老あるいはメディシンマンのなかには、一人で5,000種類におよぶ治療法を知っている人という。専門家は、これらのサンプルを本国に持ち帰って、ラボラトリーで化学分析をして、人工的に合成して、新薬として売り出すというのである。近年、アメリカの製薬会社の多くは巨大な利潤を享受しているが、そのかなりの部分が、このような形でおこなわれている新薬開発による。

そこで、ブラジル政府は、アメリカの製薬会社がアマゾンの長老たちに特許料を支払う制度を新しくつくった。ところが、アマゾンの長老たちはこぞって、アメリカの製薬会社から特許料を受け取ることを拒否したのである。自分のもっている知識が、人類の幸福のために使われることほどうれしいことはない。その喜びをおかねにかえるというさもないことはしたくないという理由からであった。

あくどく利潤を追求して止まない資本主義的企業のあり方と、アマゾンの長老たちのすがすがしい人間的な生き方との、この鮮明な対照こそ、現代文明の病理学的現象である地球環境問題を生み出したもので、それはまた、二十一世紀において地球環境問題の根元的な解決につながるものであるように思われる。

引用文献

- 宇沢弘文(1989) 『豊かな社会の貧しさ』 岩波書店.
- 宇沢弘文(1993) 『二十世紀を超えて』 岩波書店.
- 宇沢弘文(1994-95) 『宇沢弘文著作集—新しい経済学を求めて』 (全 12 卷)岩波書店.
- 宇沢弘文(1995) 『地球温暖化の経済学』 岩波書店.
- 宇沢弘文(1995) 『地球温暖化を考える』 岩波書店.
- 宇沢弘文(1998) 『日本の教育を考える』 岩波書店.
- 宇沢弘文(1999) 『ゆたかな国をつくる—官僚専権を超えて』 岩波書店.
- 宇沢弘文(2000) 『社会的共通資本』 岩波書店.
- 宇沢弘文(2003) 『経済学と人間の心』 東洋経済新報社.
- H. Uzawa(2003) *Economic Theory and Global Warming*, New York: Cambridge University Press.
- H. Uzawa(2005) *Economic Analysis of Social Common Capital*, New York: Cambridge University Press.